大事にしたいものとの出会い

マタイによる福音書 13:44-50

賈　晶淳

11 月の第 4 木曜日はアメリカの収穫感謝祭の日で、その翌日の金曜日をブラックフライデーと言い、その年の売れ残りの一掃セールが始まりますが、日本でもこの頃は流行るようになりました。このセールが終わるとアドベント（待降節）に入り、店はクリスマスに向けての商品に入れ替えます。農民が春先に種を蒔き、この季節に収穫を感謝する喜び、ブラックフライデーに欲しいものを探し求め安く買い上げる喜び、子どもたちがアドベント・カレンダーを捲りながらクリスマスの日が来るのを待ち、イブにサンタクロースからプレゼントを貰う喜び、この季節は皆をわくわくさせます。子どもたちは毎年この時期を通し、期待することや待つことを覚えながら成長して行くのです。

今日の証詞の題を「大事にしたいものとの出会い」と付けました。大人である私たちも年末のこのシーズンのように大事にしたいものとの出会いを夢見ながら生涯を過ごしているのかも知れません。出会いへの期待がない人は感動することや機会も少ないでしょう。逆に切に求めていたにもかかわらず見逃し、つかめない人もいるでしょう。本日の聖書には大事にしたいものと出会った人々について記されています。

本文は他の福音書には出ていない内容で、三つのたとえが一緒になっています。三つを区分するのは「**天の国はつぎのようにたとえられる**」という言葉です。44 節、45 節、47 節の三ヵ所の冒頭に記されています。このような場合は三つの話をどう扱うべきかが気になります。つまり、異なる内容として受け止めるべきか、強調のための一つの内容として理解するべきかの問題です。今回私が選んだのは一つの内容であるという理解です。

それではご一緒に考えたいと思います。

第 1 のたとえはある人が畑で宝を発見する話です。第 2 のたとえは商人が良い真珠を見つける話です。第 1 と第 2 のたとえは宝と良い真珠の話で、何かの運と関連する内容に見えても不思議ではありません。天の国は運の良い人と深い関連があると思われてしまうと本文はご利益の宗教の教えですね。ただ、それでこの話の本質を理解したとは思いません。

ここで三つの話を一緒に合わせて理解してみたいと思います。三つの話にはそれぞれ主人公がいます。よく読みますと、三者ともよく働いている人です。第 1 話の主人公は農民です。第 2 話の主人公は商人です。第 3 話の主人公は漁師です。これらの三者はきっと当時イエスの活動の中心であったガリラヤ湖の周辺の主な職種である農業、商業（貿易）、漁業に従事する人々であったと思われます。

ここで今日の証詞の題を「**大事にしたいものとの出会い**」とつけたことですが、主人公たちが大事にしたいものと出会ったことを想定した上で三つのたとえを理解したいという意味です。「大事なもの」ではなく「大事にしたいもの」にした理由は話の中で説明できればと思っています。

先ず、三者それぞれが出会いたかったことについて考えてみます。分かりやすいたとえから話しますと、第 2 話の商人のことで、商人が探しているものは良い商品で、その中でも真珠を求めていて大変気に入ったものに出会います。商人は持っていた全てのもの（他の商品）を売り払い、真珠を買い取って喜んでいる話です。第 3 話のたとえを読みますと、漁師が選び分ける程多くの魚を獲り、大いに喜んでいる姿です。それは良い漁場を持った上で、絶えず管理に精を尽くしていたことでしょう。小さい魚は捨てるより湖に戻したと理解した方がよさそうな気がします。

そうしますと宝を発見した農民の話である第 1 話のたとえをどう理解するかがかなり難しい気がします。農民が他人所有の畑で宝を発見したのは日雇いか或いは小作農で農作業をしていた最中だった

と思われます。この農民には持ち物がどれほどあったのでしょうか。借金をしたかも知れませんが宝が埋まっていた畑を買い取ります。後に宝を全て売り払って借金を返すために使ったとしても、農民にずっと残るものがあります。それは農民にとって最も大事な畑です。この人が本当に求め出会いたかったのは農地であったと思ってみるのも良いと思います。その後も農民は畑の所有の喜びで良い土地にして行くと思います。

ここで一つの発見とは、三者が各々の仕事（生産活動）に従事していたところで出会いがあったということです。45 節に「**商人が良い真珠を探している**」と書いてあり、47 節には「**網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める**」と記されています。生活の現場で働いている最中に出会いがあったのです。大事な出会いは遠いところで求めるのではなく、今、直ぐ近くにありますよというメッセージかも知れません。

ということからこの天の国のたとえの共通点は、大事にしていくものとの出会いであったと考えられます。農民が農地を、商人が市場を、漁師が漁場を、誠意や信頼を持って、その生涯を良きものにしていくことです。そこには「物」と「者」の区分はありませんので大事にしたい「もの」にしました。当時の人々が水辺で、野原で、市場でイエスと出会い、その教えを聞き、その働きを見、その出会いを一生大事にしていきたいと思ったのではないかと思います。今の私たちにとってはそれが聖書との出会いであり、教会の仲間との出会いであり、大切な家族との出会いや信頼できる友との出会いになると思います。

大事にしたいものとの出会いのもう一つの意味は、主体的な選択にあります。初めから偉く大事なものではなく、小さくても自分が選んだものを大事にしていきたいと思えば大事なものになれるということです。それは同時にその対象を通して自分も大事な存在になれるということです。農民が農地を、商人が市場を、漁師が漁場を大事に管理すれば、代わりに多くの喜びを得られるように。

今年 3 月に亡くなったノーベル文学賞受賞者の大江健三郎さんが生涯一緒に暮らした息子光さんは、父親にとって特別な存在であり、大事にし続けた存在でありました。大江さんは脳に障害を持つ光さんを通し、世界を見、人類共生への創作などが出来、世の人々に大事にされる存在となりました。

出会いは最初から素晴らしいものではなくても大丈夫です。その出会いを大事にし続けるうちに特別な出会いとなり、自分も大事にされるようになって行くのです。私が出会ったものの中では百人町教会がそうでした。見た目でこの教会を評価できるものは殆どありません。礼拝堂もなく、パイプオルガンもありません。しかし、礼拝の場所を移しても、コロナで対面礼拝がしばらくできなくても変わらず続けているのです。高田馬場の狭い貸し部屋に座っていますと人々しか見えません。皆さんの語りあう声がよく聞こえます。それが大事だと思います。出会いたいものは礼拝堂ではありません。証詞を通し互いの生き方や心の持ち方にも出会います。本当に大事にしたいものばかりです。ですから聖書の教えや語られた証詞の内容を聞き落とさないように大事にし、それを磨き上げる応答の時を持ちます。難しかった内容も川底の小石のように丸くなって理解できるようになり、各々の信仰告白へと変わります。神と出会い、世界と出会い、仲間と出会い、自分と出会います。そのすべてが大事にしたいものです。それは大きな喜びであり、誇りです。

（2023 年 11 月 26 日証詞より）